

1 調査目的

本県における薬剤耐性対策の推進にあたり、抗菌薬や薬剤耐性等への認識を把握し、今後の取組みの参考資料とすることを目的に実施しました。

2 結果の概要

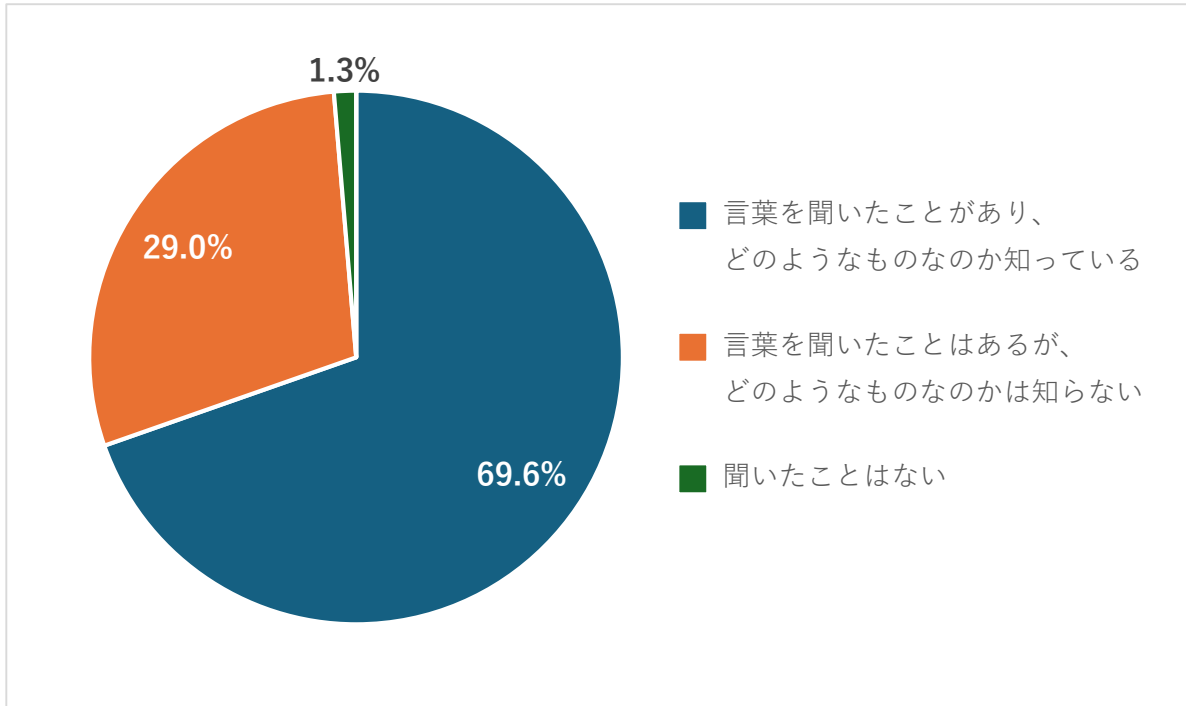
- ・「抗菌薬」・「抗生物質」の認知度（言葉を聞いたことがある人の割合）は 98.6%、「薬剤耐性」の認知度（言葉を聞いたことがある人の割合）は 76.5%であった。
- ・言葉の認知度が高い一方で、「抗菌薬」・「抗生物質」の効果、「薬剤耐性」の意味や医療に与える影響などについては、まだ一般的に知られていないことが分かった。
- ・かぜと診断されたときの処方に対する希望については、自身（大人）への処方と小児への処方とで、大きな差は見られなかった。
- ・茨城県が行っている薬剤耐性対策に関する普及啓発のための施策について、「知っている又は見たことがあるものはない」と回答した割合が 74.3%であった。今回いただいた様々なご意見を基に、効率の良い普及啓発の方法について、改めて検討していく。

【問1】（抗菌薬の認知度）

あなたは、「抗菌薬」・「抗生物質」という言葉を聞いたことがありますか。

次の中から、あてはまるものを1つ選んでください。

(n=1,202)



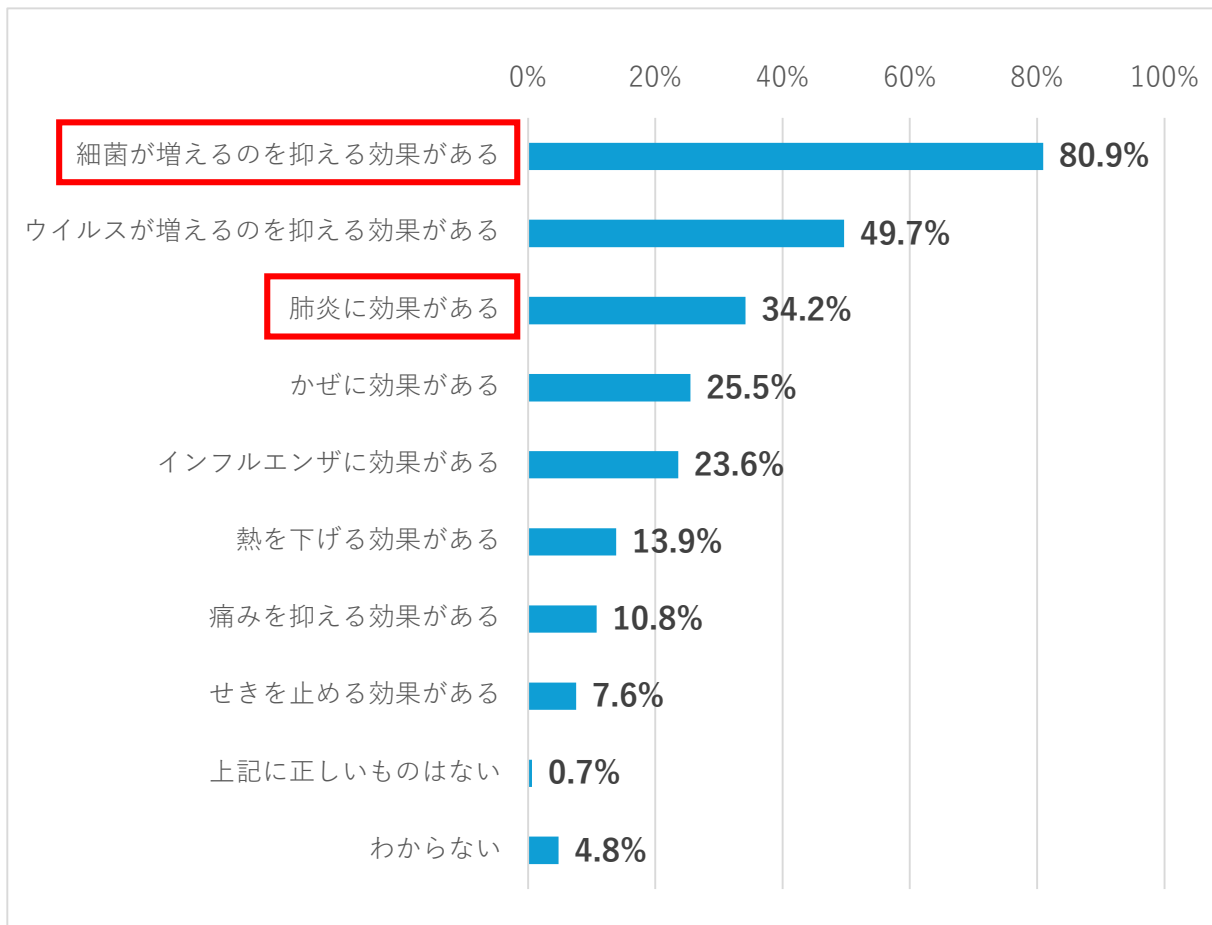
○「言葉を聞いたことがあり、どのようなものなのか知っている」が最も多く 69.6%、次いで「言葉を聞いたことはあるが、どのようなものなのかは知らない」が 29.0%、「聞いたことはない」が 1.3%であった。

【問2】（抗菌薬の効果への理解）

あなたは、抗菌薬・抗生物質にはどのような効果があると思いますか。

次の中から、あなたが正しいと思うものを全て選んでください。

(n=1,202)



※ は抗菌薬・抗生物質の効果を表す

◇「抗菌薬・抗生物質」は、細菌を壊したり、細菌が増えたりするのを抑える薬である。多くのかぜやインフルエンザの原因はウイルスなので、効果は期待できない。

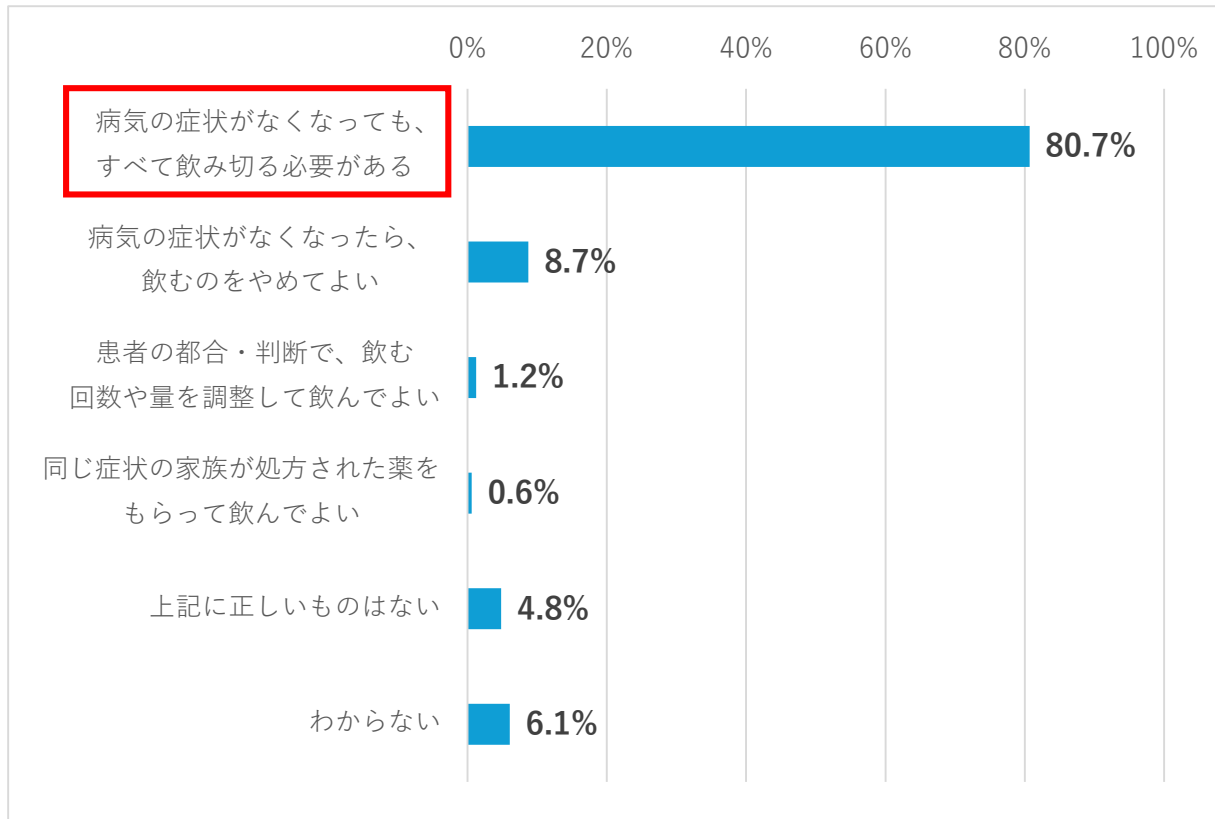
○「細菌が増えるのを抑える効果がある」（80.9％）が最も多かった一方で、「ウイルスが増えるのを抑える効果がある」（49.7％）、「かぜに効果がある」（25.5％）、「インフルエンザに効果がある」（23.6％）との回答も少なくなかった。

【問3】（抗菌薬の服用方法への理解）

あなたは、抗菌薬・抗生物質をどのように飲めばよいと思いますか。

次の中から、あなたが正しいと思うものを全て選んでください。

(n=1,202)



※ は抗菌薬・抗生物質の飲み方を表す

◇抗菌薬・抗生物質は多くの種類があり、医師は患者に最適な薬を処方している。また、薬によって1日に飲む回数や1回に飲む量が異なる。

◇飲むのを途中でやめたり、回数や量を勝手に調整したりしてしまうと、病気がきちんと治らない恐れがある。また、残った薬や他人の薬を自分の判断で飲むと、病気に合わなければ効かないだけでなく、思わぬ副作用が出ることもある。

○「病気の症状がなくなっても、すべて飲み切る必要がある」（80.7％）が最も多かったが、「病気の症状がなくなったら、飲むのをやめてよい」（8.7％）、「わからない」（6.1％）という回答もあった。

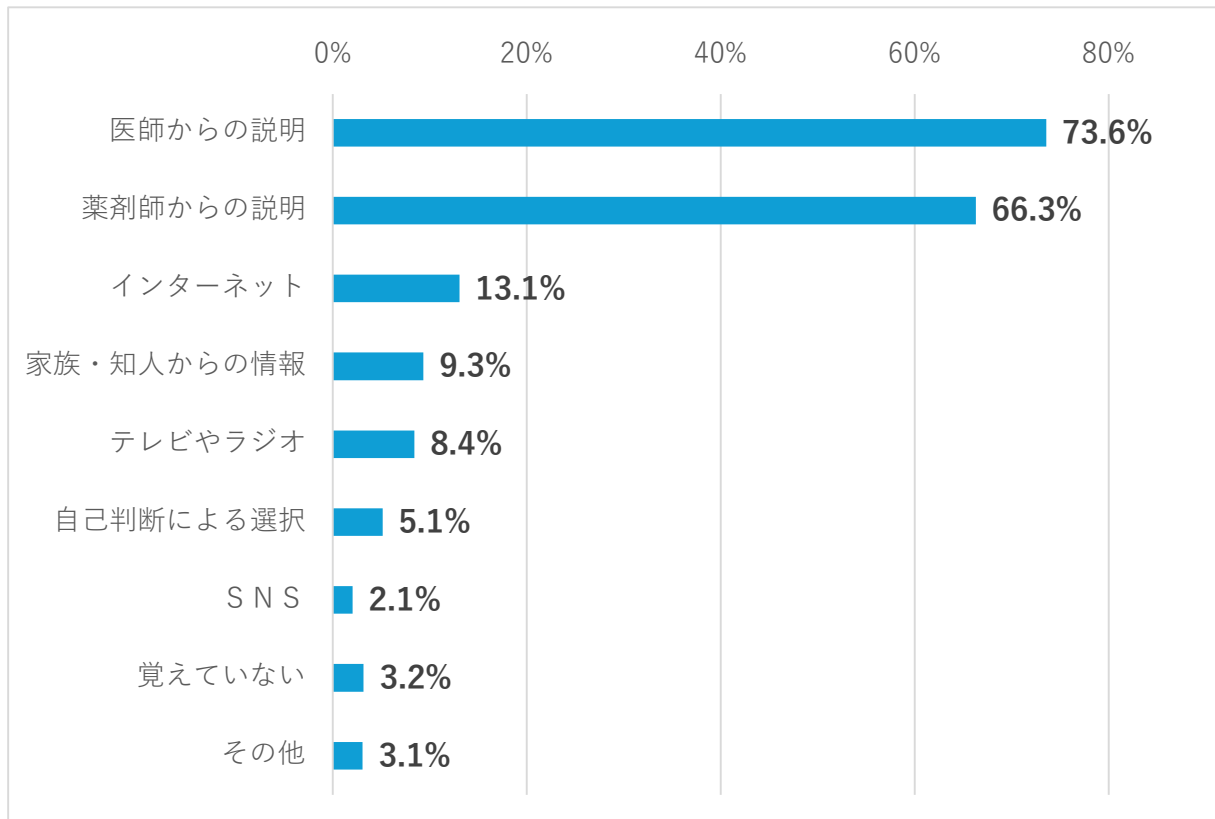
【問4】（抗菌薬の服用方法に関する情報）

（問3で選択肢1～4を選択した方へ）

あなたは、抗菌薬の服用方法についてどのように知りましたか。

次の中から、最もあてはまるものを最大3つまで選んでください。

(n=1,071)



○「医師からの説明」（73.6%）と「薬剤師からの説明」（66.3%）の割合が高かった。

○「自己判断による選択」（5.1%）との回答もあった。

○「その他」（3.1%）として、次のような意見が挙げられた。（計 33 件）

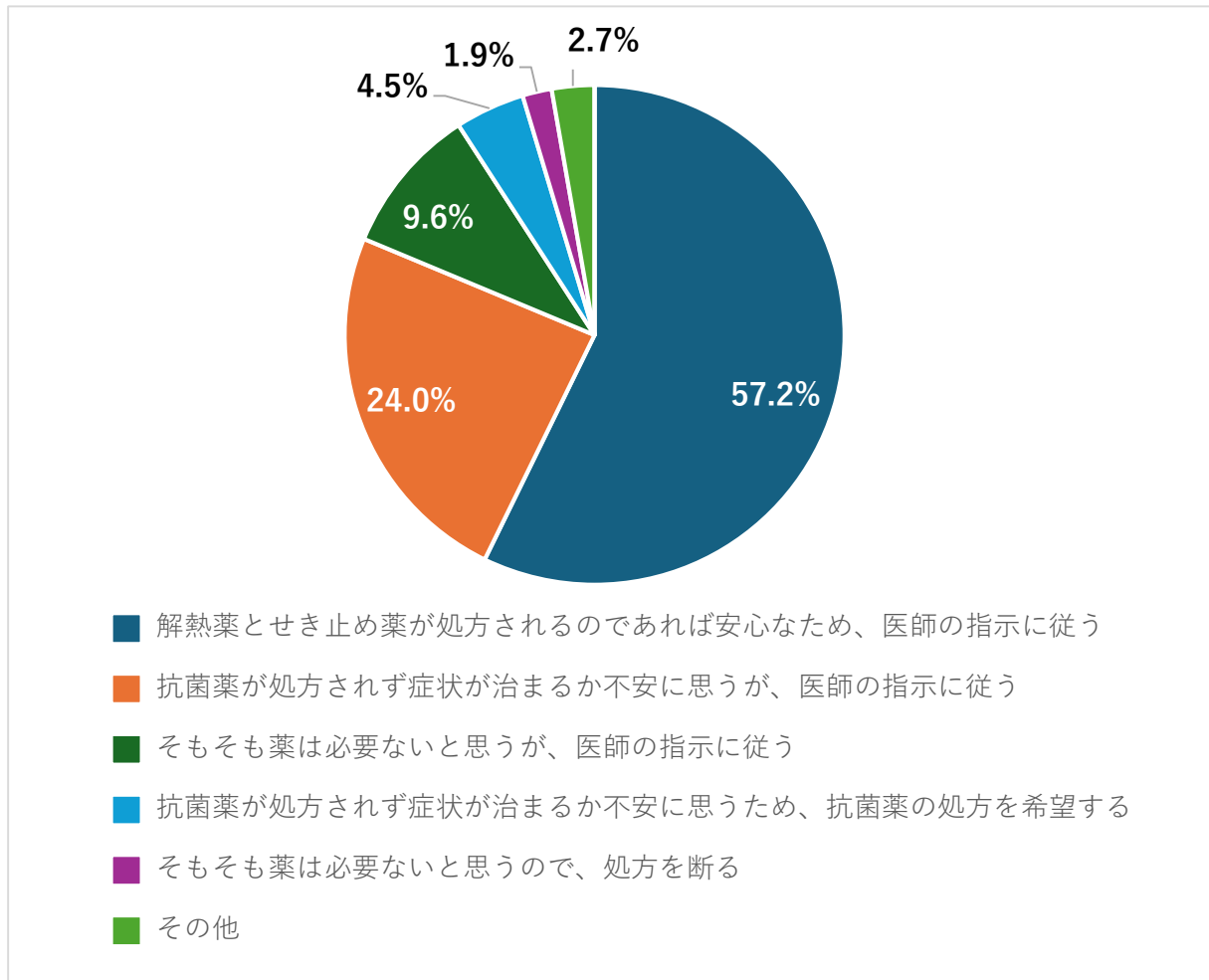
- ・ 薬剤情報提供書（薬局でもらう薬の情報が記載された文書）
- ・ 大学の講義
- ・ 自身が医療従事者
- ・ 書籍、マンガ、情報誌、新聞 等

【問5】（自身への処方に対する希望）

あなたは、熱と咳の症状で医療機関を受診した際に、医師から「風邪です。解熱薬とせき止め薬を処方します。抗菌薬は必要ないため処方しません。」と説明を受けた場合、どうしますか。

次の中から、あなたの行動に最も近いものを1つ選んでください。

(n=1,202)



○「解熱薬とせき止め薬が処方されるのであれば安心なため、医師の指示に従う」（57.2％）が最も多かった。

○一方で、抗菌薬が処方されず症状が治まるか不安に思う（「抗菌薬が処方されず症状が治まるか不安に思うが、医師の診断に従う」（24.0％）と「抗菌薬が処方されず症状が治まるか不安に思うため、抗菌薬の処方を希望する」（4.5％）を合わせた）割合は 28.5％であった。

○「その他」（2.7％）として、次のような意見が挙げられた。（計 33 件）

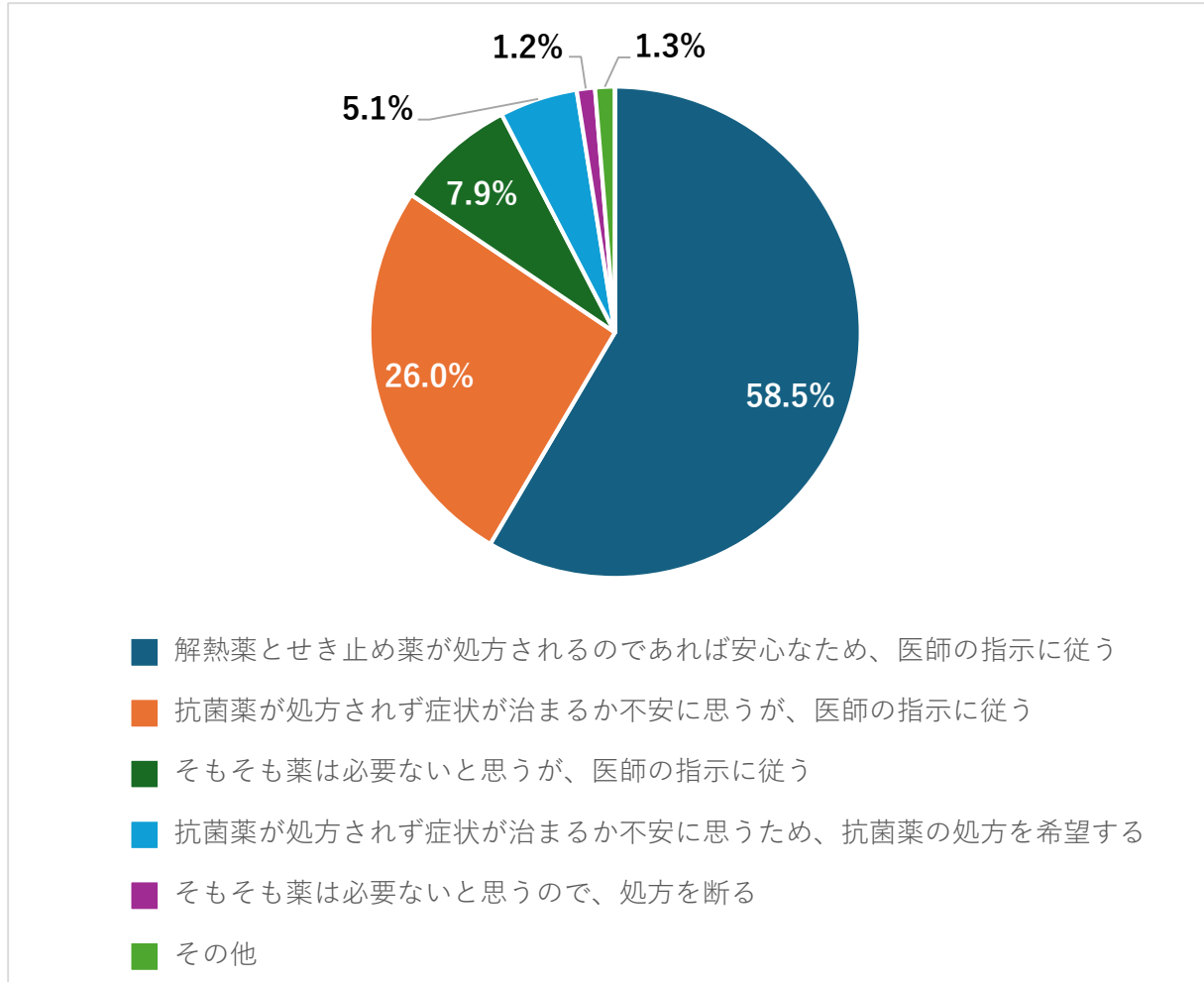
- ・ 抗菌薬とは何かをまず伺う
- ・ 数日経っても解熱しない場合や咳がひどくなる場合は再度受診しようとする
- ・ 抗菌薬が必要ない理由を求める
- ・ 安心かどうかではなく、医師が必要と判断する薬を処方されるならば服用する

【問6】（小児への処方に対する希望）

あなたのお子さんやお孫さん(15歳以下)が、熱と咳の症状で医療機関を受診した際に、医師から「風邪です。解熱薬とせき止め薬を処方します。抗菌薬は必要ないため処方しません。」と説明を受けた場合、どうしますか。

次の中から、あなたの行動に最も近いものを1つ選んでください。

(n=997※)



※問5と比較するため、「15歳以下の子や孫はいない」を選択した方を除いた数をnとした。

○「解熱薬とせき止め薬が処方されるのであれば安心なため、医師の指示に従う」(58.5%)が最も多かった。

○一方で、抗菌薬が処方されず症状が治まるか不安に思う(「抗菌薬が処方されず症状が治まるか不安に思うが、医師の診断に従う」(26.0%)と「抗菌薬が処方されず症状が治まるか不安に思うため、抗菌薬の処方を希望する」(5.1%)を合わせた)割合は31.1%であった。

○「その他」(1.3%)として、次のような意見が挙げられた。(計13件)

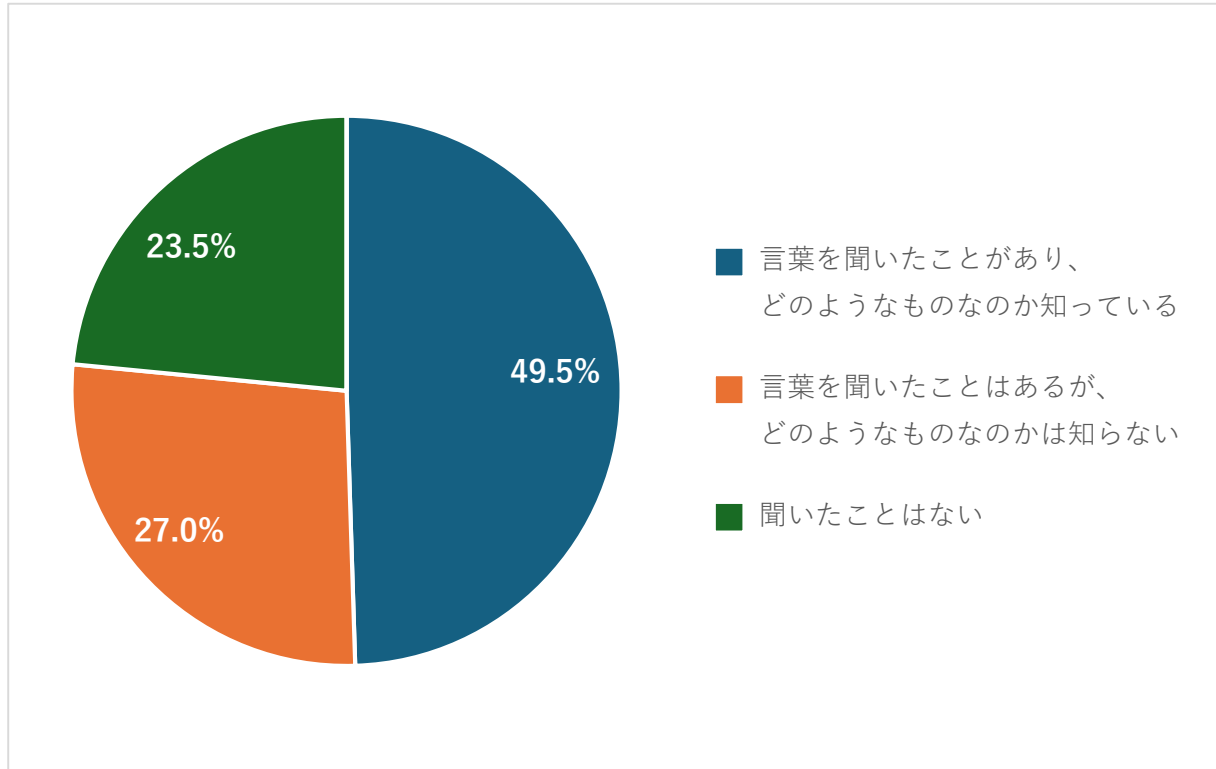
- ・ 抗菌薬とは何かをまず伺う
- ・ 抗菌薬が必要ない理由を求める
- ・ 病院を変えてみる
- ・ 副鼻腔炎での熱が多く、風邪と診断されても二、三日熱が下がらずにまた受診することが過去にあったので、念のため処方されたい気持ちはある

【問 7】（薬剤耐性の認知度）

あなたは、「薬剤耐性」・「薬剤耐性菌」という言葉を聞いたことがありますか。

次の中から、あてはまるものを1つ選んでください。

(n=1,202)

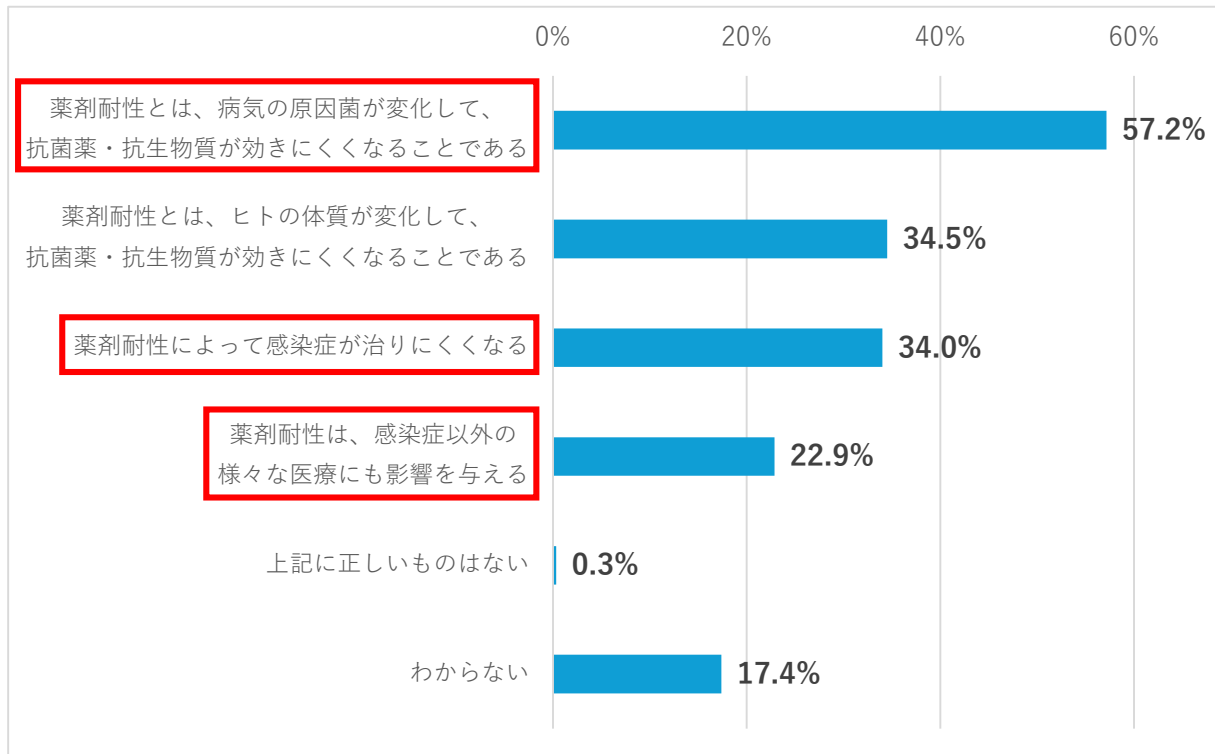


○「言葉を聞いたことがあり、どのようなものなのか知っている」が最も多く 49.5%、次いで「言葉を聞いたことはあるが、どのようなものなのかは知らない」が 27.0%、「聞いたことはない」が 23.5%であった。

【問 8】（薬剤耐性への理解）

あなたは、薬剤耐性とはどのようなものだと思いますか。次の中から、あなたが正しいと思うものを全て選んでください。

(n=1,202)



※ は薬剤耐性について説明した内容を表す

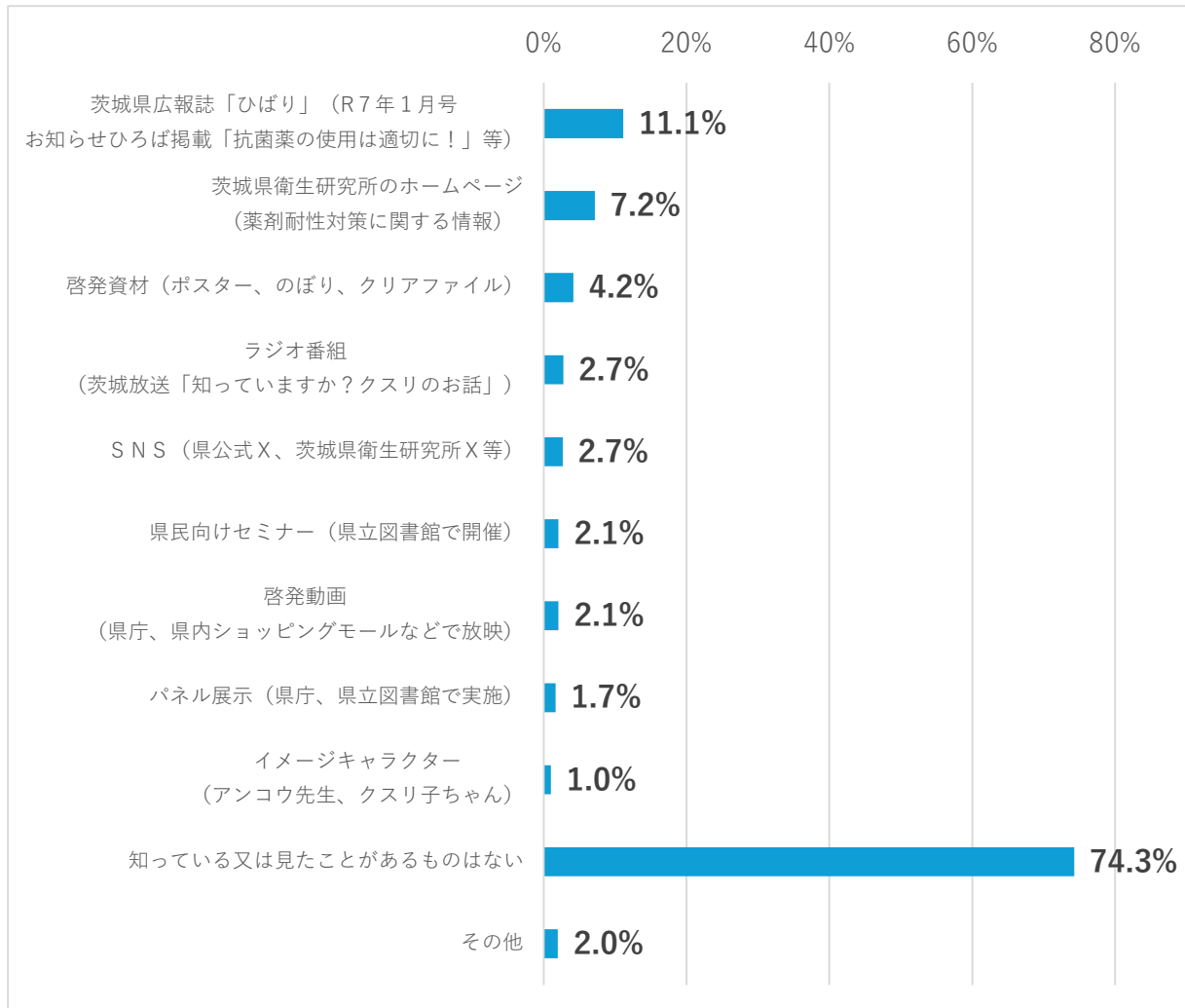
◇「薬剤耐性」とは、病気の原因菌が変化して、抗菌薬・抗生物質が効かない、効きにくくなることである。このような菌（薬剤耐性菌）が増えると、これまで抗菌薬・抗生物質を飲めば治っていた感染症が治りにくなり、手術の実施が困難になるなど、様々な医療に影響を与える。

○「薬剤耐性とは、病気の原因菌が変化して、抗菌薬・抗生物質が効きにくくなることである」が 57.2%と最も多いが、「薬剤耐性によって感染症が治りにくなる」が 34.0%、「薬剤耐性は、感染症以外の様々な医療にも影響を与える」が 22.9%と低く、「わからない」も 17.4%と、薬剤耐性に関しての理解度は低かった。

【問 9】（薬剤耐性対策に関する施策の認知度）

あなたは、茨城県が行っている薬剤耐性対策に関する普及啓発のための施策について知っていますか。次の中から、あなたが知っている又は見たことがあるものを全て選んでください。

(n=1,202)



○「知っている又は見たことがあるものはない」(74.3%) が最も多かった。

○知っている施策の中では、「茨城県広報誌『ひばり』(R7年1月号お知らせひろば掲載『抗菌薬の使用は適切に！』等)」(11.1%) が最も多く、次いで「茨城県衛生研究所のホームページ(薬剤耐性対策に関する情報)」(7.2%)、「啓発資材(ポスター、のぼり、クリアファイル)」(4.2%) の順となった。

○「その他」(2.0%) として、次のような意見が挙げられた。(計 24 件)

- ・病院でパンフレットをもらった
- ・健診時の張り紙
- ・どこかで見たが覚えていない

【問 10】（自由記述）

薬剤耐性対策を推進するために、あなたが重要だと思うことについてご自由にお書きください。

- ・ 医師と薬剤師の説明と、分かりやすく書かれた文章を配ればいいと思います。体調悪くて受診しているのに、ただ聞くだけでは忘れてしまうので。
- ・ 行政機関による普及啓発は重要だが、日頃接する医師や看護師、薬剤師などが高齢者にわかりやすく教示することがより重要ではないか。「抗菌薬は処方しない」とだけ伝えるのではなく、その理由をも説明してもらわなければ患者は納得しにくい。
- ・ 医師からの説明、薬剤師からの説明、それを理解できるまで聞く姿勢
- ・ あまり知られていない気がする。病院などには掲示していないのでしょうか？待合室に掲示してあれば目につくような気がするのですが。
- ・ 回覧板でのアナウンスや、学校でリーフレット配布することで世代問わずに広く周知する。
- ・ スーパー（ドラッグストアという意見もあり）や公民館などの目立つ場所にポスターを掲示していただくとか、主婦や高齢者も手軽に情報を得られると有難いです。
- ・ 市町村の広報にも載せるなど、身近なところから情報発信できると良いのではないかな。
- ・ 一般的な風邪と抗菌薬について知識を得る機会があれば良いのでは。妊娠時の母親学級や出産後の乳児検診等で学ぶ機会があれば嬉しい。
- ・ 怪我などの細菌性では必要あると思いますが風邪では必要ないと知らない人が多いと思います。
- ・ ウイルスには効かない、菌に効くこと、風邪はほとんどがウイルスであること、子どもの風邪のような症状でも溶連菌の場合はきちんと検査をしたうえで抗生剤を処方している、ことの説明を医師、薬剤師など患者の近くの専門の立場の方からその都度アナウンスすること。
- ・ 一般の人には学校教育の中での教育をもっと増やし、また処方権のある医師への教育をもっと徹底すべきだと思う。
- ・ 特許切れの抗菌薬や抗生物質は薬価を切り下げるのではなく、逆に高くするべき。安易な使用を削減すると同時に、供給する製薬メーカーの利益を確保し必要な供給は維持するため。
- ・ 家畜用抗生物質の使用を制限する。
- ・ 病院では医師が処方しなくなっているが、欲しがる患者がまだいると聞く。医院や調剤薬局での説明はもちろんだが、啓発のためにテレビ CM などの媒体が増えると良いと思う。
- ・ 抗生物質の処方によく考えて処方して欲しいが、必要な処方に足踏みもしないで欲しいです。
- ・ 自分や家族など身近な問題になると意識を持てると思うのですが…。
- ・ 薬剤耐性菌や感染症に限った話ではないが、そもそもの予防として普段から抗菌薬を使うような感染症に罹患しないように心がけることが大切であろう。まずは毎日の手洗い、手指などのアルコール消毒、マスクの着用、うがいなどが挙げられる。また日頃から生活習慣を整え、食事や休養をしっかり取るなど、健康を意識した生活を送ることも必要である。
- ・ 抗菌薬以外の薬をスイッチ OTC 化することで、軽度な症状の受診を減らし、医療機関で抗菌薬が安易に処方される機会を減らすこと。セルフメディケーションの推進によって医療費削減にも寄与する。
- ・ 今だと YouTube のショート動画が露出しやすいと思います。発信する相手には一切予備知識がないという前提で小出しに情報発信を目指すなど。様々な共有サイト・アプリがありますが、同じ動画を添付しているのに反応に大きな差が出るので様々な媒体で発信を試すといいと思います。

など 472 件の意見があった。

3 アンケート結果を受け、今後の事業展開・アンケートの活用方法等について

- ・「抗菌薬・抗生物質」という言葉が、ある程度認知されてきている一方で、効果や飲み方については誤った認識を持っている方もおり、今後はその点に重点を置いて普及啓発に取り組む必要がある。
- ・「薬剤耐性」とは、病気の原因菌が変化して、抗菌薬・抗生物質が効きにくくなることである、ということは半数以上の方が理解されていたが、薬剤耐性により感染症が治りにくくなったり、感染症以外の様々な医療にも影響を与えることになったりするということは、まだ浸透していないことが伺えた。薬剤耐性は身近な問題であるに関心を持ってもらうために、今後はその点に重点を置いて普及啓発に取り組む必要がある。
- ・病院や薬局へポスターを配布してから5年以上経過しているため、ポスターを目にする機会が少なくなっていることが伺えた。ポスターを更新し、病院や薬局、その他ご意見いただいた場所で掲示できるよう調整していく。
- ・医療従事者による説明の時に使用できるリーフレット等の作成を検討する。
- ・幅広い世代の方へ情報が届くよう SNS だけでなく回覧板や広報誌などの方法についても再考し、あらゆる情報媒体を用いた広報を検討する。
- ・医療機関に対して、県内の薬剤耐性菌に関する情報提供を行う。

4 調査の概要

(1) 調査形態

調査時期：2025年8月14日～2025年8月27日23時59分

調査方法：インターネット（アンケート専用フォームへの入力）による回答

モニター数：1,686名

回収率：71.3%（回収数1,202名）

回答者の属性：以下の通り

		人数（人）	割合（%）
全体（n）		1,202	100.0
地域別	県北	102	8.5
	県央	381	31.7
	鹿行	54	4.5
	県南	387	32.2
	県西	85	7.1
	県外	193	16.1
性別	男性	513	42.7
	女性	689	57.3
年齢別	16～19歳	9	0.7
	20～29歳	51	4.2
	30～39歳	166	13.8
	40～49歳	298	24.8
	50～59歳	322	26.8
	60～69歳	238	19.8
	70歳以上	118	9.8
職業別	自営業	91	7.6
	会社員	456	37.9
	団体職員	51	4.2
	公務員	65	5.4
	主婦・主夫	245	20.4
	学生	25	2.1
	無職	138	11.5
	その他	131	10.9

(2) 担当課

茨城県衛生研究所企画情報部

電話：029-241-6652

E-mail：eiken1@pref.ibaraki.lg.jp

（注）割合を百分率で表示する場合は、小数点第2位を四捨五入した。四捨五入の結果、個々の割合の合計と全体を示す数値が一致しないことがある。

また、図表中の表記の語句は、短縮・簡略化している場合がある。